

「スポーツの構造」試論（3）

—構造概念、構成要素、分類方法の検討によるアプローチ—

山本 章雄

抄録

現代人の営みにおいて大きな位置を占めてきている「スポーツ」を、適正に活用し人間生活を豊かで幸せなものとするためには、その「姿（構造）」を明らかにし有効に実施することが不可欠である。本研究では、山本の先行研究に引き続き「スポーツ」を構造として解明するため、構造の概念、構成要素の考え方、分類の方法などについての論考を進め、「スポーツ」の構造全体をシステムとして理解するための考察を行った。

その結果、「構造」は、部分によって形づくられた一定の安定性を持った全体と理解され、不変ではなく人々の行為によって変容し、上位の構造が下位の構造を制御する機能を具備しているものである。「要素」の検討においては「論理思考（ロジカル・シンキング）」などを用い、最終的に「システム思考（システム・シンキング）」の手続きが必要である、「分類」作業では、何を目的として構造解明を行おうとしているのかを明確にする必要性があることなどが明らかになった。

キーワード：スポーツ、構造概念、構成要素、分類方法、システム思考

1. はじめに

社会におけるスポーツのプレゼンスは近年大きな高まりを見せており、この状況は様々な動向に影響を与え、2011年（平成23年）6月に「スポーツ基本法」の公布が実施され、国に於けるスポーツの振興、普及を推進する法律的な整備が行われたこともその顕著な例として考えることができる。また、「スポーツ基本法」の第3条に謳われている、スポーツに関する施策を総合的に策定し実施することは国の責務であると位置づける規定を受け、2015年10月に文部科学省の外局として「スポーツ庁」の創設が行われた。これは、それまでスポーツ教育は「文部科学省」、スポーツによる健康づくりは「厚生労働省」、スポーツ施設建設は「国土交通省」など縦割り行政により分断されていたスポーツ施策のシステムが一元化され、スポーツ政策の立案や実施が有機的かつ網羅的に行われるようになったことであり、併せて、スポーツムーブメントの高まりの現れとして位置づけることができる。

一方、スポーツの現場では種目の多様化だけではなくスポーツを実施する人間の多様化、目的の多様化といったイノベーションが生起しており、世界全体で1億3000万人の競技人口があり賞金総額が100億円を超える大会が行われる「eスポーツ」の盛隆、「ゆるスポーツ」という名称で提唱されているリバースインテグレーション（Reverse Integration：逆方向の統合・動作に制約を設け心身の様態が違う人達がみんな同じ条件で競技することが可能なスポー

つ) の考え方を基盤とするニュースポーツの出現、また、「超人スポーツ」として開発が進められている、人間拡張工学により考案されたデバイスを装着し、人間の能力を補綴することを認めるスポーツの登場など新しい潮流が様々な場所や分野で起こっている。

このような動きを背景にスポーツの実施状況にも変化が見られ、「スポーツ白書」¹⁾によると、国民のスポーツ実施率(週1日以上スポーツを実施する人の割合)は向上し、1988年に26.4%であった実施率が30年後の2018年には55.1%へと倍増したことが示されている。また、スポーツ実施率の向上は経済へも波及し、2016年に7.6兆円であった「スポーツGDP(Sports Gross Domestic Product)」が2020年には13.9兆円に達し、2025年には15.2兆円になることが「スポーツ未来開拓会議」²⁾(スポーツ庁と経済産業省の共同で設置)によって公表されており、「するスポーツ」(競技スポーツ・市民スポーツ・障がい者スポーツなど)だけではなく、「見るスポーツ」(競技場での応援・テレビ観戦など)「支えるスポーツ」(スポーツボランティア・障害者サポートなど)が広く普及してきている。

また、スポーツを取り巻く環境、特に国際社会の状況とスポーツの関わり合いにも強い関係性が醸成されており、2022年開催の北京冬季オリンピックでは開催国である中国の政治姿勢(新疆ウイグル自治区等での人権問題対応)に対する批判を明確にするため、欧米各国の政府関係者が大会への出席をボイコットする「スポーツ活動の政治化」が顕在化してきている。

このように、日本を含む世界全体において「スポーツ」は現代社会を構成し動かす重要な「社会装置(文化)」として進展・拡大してきており、この重要な「文化」を有効に活用し適正に運用することは人間生活を幸せで豊かなものとするために必須の条件となってきた。また、このように人間生活の基盤を支える「文化」となった「スポーツ」を、将来に向けてより充実させ発展したものとするためには、現在行われている「スポーツ」の「文化としての姿」を解明し、正しく把握することが基礎研究の手続きとして重要性を増してきており、併せて、明確となった「スポーツの姿」を未来に向けてどのように機能させていくべきであるかについても検討することが求められている。

山本³⁾は社会を動かす重要な「社会装置」として進展・拡大してきている「スポーツ文化」に着目し、「文化そのものについての検討」「スポーツの発祥や発展の道程」および「スポーツ文化の現状」についての検証を行い、本論考に関与する考察を以下のように行っている。

- (1) 「文化」の考え方に関しては様々な議論が行われてきており、その基本的な視座として「全体性(ホリスティック)」(注:文化は人間が作り上げ維持していく「すべて」を枚挙しない限り理解できないとする考え方)が重要であることが示された。
- (2) 人間社会における「文化としてのスポーツの胎動」は先史時代より芽生えていたことが明らかとなり、古代文明では「政治」「経済」「価値観」といった文化的要因を、中世に入ると「社交」「遊興」としての色彩を、また、「ルネサンス(Renaissance)運動」では「教育」といった要因を、そして近代には「賭博」「倫理」「道徳」といった文化的要因を

「スポーツ」が獲得していったことが確認された。

また、山本⁴⁾は社会学的な視座より「文化」そのものに関する構成要素やその位相に関する検討、また、哲学的な観点より「構造」や「要素」そのものが存在するのかといった原理的な検証を行い、本論考に於いて足場として位置づけることのできる結論を以下のよう

- (1) 「文化」の構成要素に関する考え方については多様な議論が行われており、また、アプローチの方法としては「文化」が成立するために必要な構成要素を条件面から捉えようとする立場がある一方、「文化」自体を分析的な視線で見つめ構成されている要素を個別に列挙する立場があることが明確となった。
- (2) 「文化」を構造として解き明かそうとした場合、そこには様々な位相が存在することが多くの識者によって示されており、1) 表層だけを捉えるのではなく深部に至る検討をする、2) 行為をその出発点に据え人間の挙借（立ち居振舞い）として検討をする、3) 文化をシステムとして位置づけるため総体的な視点で検討をする、4) 一般生活者の発想で徹底的に疑う態度で検討をする、5) 見せかけの關係に隠されている交絡変数に充分留意しながら検討をすることの重要性が明らかとなった。
- (3) 「文化」は変容をし続けるものであり、構成する要素も常に変容、消滅、創生などを繰り返す。また、その変容の機序は文化が生起した時点より絶えることなく続いており、個々の人間の行為によって引き起こされるといった不安定なものではなく、文化システムとして捉えることができる総体としての形態が変容していくものであることが示された。一方、文化の「シンボリック特性」の視点から考えると、そこに内在する「表出的シンボル」が「対抗文化」を醸成し変容を引き起こす機序も明らかとなった。
- (4) 「スポーツ」が構造によって存在することを検証するために、伝統的な哲学の枠組みである「方法序説」「形而上学」「弁証法」「実存主義」「現象学」の理論を用いて行うことは、原理的な矛盾や前提条件の違いなどにより立証の限界があることが明確となった。
- (5) 「スポーツ」が構造によって実存することを明確にするためには「構造主義」を立脚点とすることが必要であり、また、具体的な検討を行う姿勢としては、多様な認識から構築される「構造」が相互に背反するといった共約不可能な状態を招かないようにすることが必要であるとする「構造構成主義」に寄り添うことが重要であることが示された。

本研究では、「スポーツの構造」を明らかにしようとする基礎的な山本^{3) 4)}の研究を手続きの足場とし、「構造」をどのように概念として捉え位置づけていくのか、「構造」を成り立たせている「要素（部分）」をどのように捉え位置づけるのか、また、「要素（部分）」を成立させる「分類（分化）」とはどのような手続的作業であるのかについて原理的なアプローチにより検証を進め、スポーツの全体像を「構造（システム）」として成立させ理解するために必要となる諸条件についての論考を行うことを目的とする。なお、この考察結果を援用することによ

り目指す「スポーツ」の内部構造、外部構造の明確化、また、「姿」（様態）が明らかになった「スポーツの構造」をどのように有効に機能させスポーツの未来を構築していくかについての議論は、紙幅の関係により本稿では扱わず、次稿「スポーツの構造」試論（4）にその検討を譲ることとする。

2. 構造の概念について

（1）構造の捉え方

スポーツを構造の視点から捉えその機能を考察しようとする際には、その前提となる「構造」に関する検討が先ず必要となる。特にスポーツを社会装置（文化）と位置づけ内在する規則性や安定性を理解する手段として「構造」を説明概念化して用いる場合には、「構造」を鳥瞰図的な視野から捉えた検討が必須となる。山本⁴⁾は、文化を構造として解き明かそうとした場合そこには様々な位相が存在することが多くの識者によって示されており、表層だけを捉えるのではなく名識をもって深部に至る検討をする、行為をその出発点に据え人間の挙借（立ち居振る舞い）として検討をすること等に充分留意しながら検討をすることが必要であると述べており、こうした丁寧な作業の必要性を示唆している。

「構造」を言葉としての観点から検討をするため「広辞苑」第7版⁵⁾を見ると、「構造とは、1. 種々の材料を用い組み立てること。また、その作り方や部分部分の作られ方。つくり。くみたて。2. 構造主義で、ものごとを成り立たせているもの相互の機能的連関。3. 数学で、集合とそこで定められた演算、集合とそこで定められた関係など、集合とそれを持っている集合的対象とから組み立てられるもの。」と記載されている。また、社会学的な視点より検討を行った長谷川⁶⁾は、「構造とは、① あるまとまりや秩序、全体に関わる概念であって、バラバラであったり、混沌状態を指すものではないこと、② 安定的で不変性の高いものであって、流動的であったり、一回起的なものを指すのではないこと、③ 現象的なものや表面的なものを指すのではなく、直接には眼に見えない、通常は観察困難なものである。」と述べ「あるまとまりを持った全体、つまりシステムを前提としたものであり、ある安定的なパターンであり、抽象するという思考作用の産物であり、一見つかみどころがないように感じられるものである。」と論じている。また、「社会装置としての構造は、日々の私たちの実践によって繰り返され、安定化していき、逆に普段と異なった行動がなされることで流動化することがあり、人々の行為の実践なしには構造は再生産されない。完全に固定的で静態的な構造はどこにもなく、安定的ではあるが、まったく不変ではなく、人々の行為の実践によって維持され、その存立が支えられており、規則性、拘束性の側面と、能動性、創造性という側面を併せ持つものである。」ことを示している。

こうした示唆は、スポーツを構造として理解しようとする時、構造を既定の枠組みとして固定的な構造物として捉えるのではなく、人々の行為による実践によって支えられていると

いう観点を忘れないようにし、個々の人間の行為が他者の行為と複雑な相互連関関係の枠組み（相互依存：interdependence）の中の在ることに留意しながら考察を進めることの重要性を示していると考えられる。同様にこのような考え方は、山本⁴⁾の、文化は変容をし続けるものでありこれを構成する要素も常に変容、要素の消滅、要素の創生などを繰り返し、その変容の機序は文化が生じた時点より絶えることなく続いているおり、そこに内在する表出的シンボルが対抗文化を醸成し変容を引き起こす機序も明らかになったにも示されており、スポーツを「構造」として捉える際の考え方として、重要な留意点であることが明確になったと言える。

また、「構造」の内部を機能という視点から見ると、より上位の構造に含まれる情報が下位構造を制御する側面（制御機能）を持っており、上位の構造が下位の構造を順次に制御する多層的な様態が「構造」にあることにも視野を広げ、スポーツの構造解析を行うことが大切であると考えることが妥当である。そして、制御機能を具備する構造が、正当性の観念である真、善、美、平和、自由といった価値や規範と結びつき社会にとって必要なものとして受け入れられ、その拘束力が社会的に是認されると「制度」としての位置を獲得することとなる機序にも意識を留めることが求められており、スポーツが社会の中で「制度」として確立されていく条件の一つに構造が持つ内部機能を含め、検討を進めることの必要性が示されていると考えられる。

一方、構造は人々の行為の実践によって支えられているという原点に立って思慮すると、人の行為は自由であり、異なった行為が選択される蓋然性が担保されていると類推でき、構造は不確定な側面「複合性」を持つと考えることができる。そしてこの「複合性」はさらに高度な複合性を生起させる原動力として機能していると考えることが必然であり、この累進的な機能の積み重ねによって「構造」は発展していくと理路することが可能である。

このように「構造」は、部分によって形づくられた一定の安定性を持った全体と理解されるが、不変ではなく人々の行為によって変容、発展し、上位の構造が下位の構造を制御する機能を具備しているものとして概念化することが、今回の論考において適切であると考えられる。

（2）構造の種類

構造の種類に関して緑川⁷⁾は、構造全体を先ずある基準で区分し、さらに別の基準でそれぞれの区分肢を区分していき、順次区分肢を細分化していく手順で構造化が行われる「階層構造」と、構造全体をある区分基準で分割し、また同じように構造全体を別の区分基準で分割し、複数の基準を独立して扱いそれぞれの区分肢を掛け合わせる手順で構造化が行われる「多次元構造」があることを示している。そして「階層構造」は、区分基準の適用順序によって異なった構造の様態となるが、「多次元構造」は表記の順序が異なるだけで構造の様

態に違いがないことも併せて示している。また、区分基準の示し方に関しては、区分に関与すると考えられる基準をすべて並び挙げる「列挙型」と、必要な区分基準だけを表示しておく、残りの区分基準は必要に応じて合成して付け加えていく「分析合成型（ファセット型）」があることを明らかにしており、最近ではこの二つの区分基準の中間的な方法として「中間型（ナンバー・ビルディング式）」という方式が工夫されており、変化し拡大していく構造の流動性に対応が行われていると述べている。

平井他⁸⁾は、複雑な様態にある事象を正しく理解するためには、複雑な様態にある全体を見つめるのではなく、事象を構成する項目をゴールデンカット（選択肢）によって分解し構造として捉えることが大切であり、その結果として「ピラミッド構造」が構築されることとなり事象の理解が容易になると述べている。また、この「ピラミッド構造」の構築に於いては、全体を的確に見つめることにより担保される「共通性: Mutually」「閉鎖性: Exclusive」「集合性: Collectively」「徹底性: Exhaustive」の理解が不可欠であることも併せて述べており、「構造」としての一つの形態を提示している。

一方、中尾⁹⁾は、実存する事象や歴史的な過程、また頭にイメージされる理念などが一定のクライテリオン（Criterion: 基準）によって分類されたタクソン（Taxon: 分類群）により構成される「類型分類構造」を示し、この構造は採用されたクライテリオンによって様々な形で構築することが可能であるため、同一事象に対して多くの構造形態の形成が可能となることを述べている。渥美¹⁰⁾はこれに関して、類型分類は特定の属性群を用いて部分集合を見出す作業であり、基本的には ①属性をもとに下位から上位へと極力自然に分類しようとする立場 ②特定の分類軸（上位カテゴリー）をあらかじめ設定し帰納的に分類しようとする立場があり、いずれも分類する当事者の主観が基準に反映されるため、「類型分類構造」には曖昧さや同定不可能な部分が含まれることが一般的であると論じている。また、「類型分類構造」に対応する構造には「規格分類構造」があり、国際規格、地域規格など社会全体で標準化された基準により分類群が構成され全体構造が形作られるもので、普遍性、共通性を具備する「構造」であるとしている。

また、「類型分類構造」「規格分類構造」と並んで大別される構造には「系譜分類構造」があり、系譜のある事象、歴史の集積がある事象に於いてその繋がりを手繰り出し、関連性を全体として体系化することにより形づくられる「構造」である。和田¹¹⁾はこのような「系譜分類構造」を生物の系統図の作成を例に示しながら説明するため、表型分類学（形態学、解剖学、生理学などにより解明された形質により生物を分類する方法）を用い分類群間の進化上の関係を構造化する手法を紹介している。その特徴としては、大きなグループ分類が小さなグループ分類を包含するグループ間の「入れ子構造」があることであり、この「入れ子構造」はクラドグラム（分岐図）として表わすことができ、生物群の進化の歴史を再構成し可視化できる「構造」であると解説している。

上述のように「構造の種類」に関しては、順次区分枝を細分化していく「階層構造」(ロジックツリー)、複数の基準を独立して扱いそれぞれの区分枝を掛け合わせる「多次元構造」(フレームワーク)、事象を構成する項目をゴールデンカット(選択枝)によって分解する「ピラミッド構造」、一定のクライテリオン(Criterion: 基準)によって分類されたタクソン(Taxon: 分類群)により構成される「類型分類構造」、国際規格、地域規格など社会全体で標準化された基準により分類群が構成される「規格分類構造」、また、系譜のある事象を手繰り出し全体として体系化する「系譜分類構造」があることが明らかとなった。

「スポーツの構造」を文化の観点より構築しようとする際には、山本³⁾が指摘するように基本的な視座として「総体性(ホリスティック)」が重要であり、その胎動は先史時代より芽生え、古代文明の時代には「政治」「経済」「価値観」など、中世に入ると「社交」「遊興」「教育」としての色彩、そして近代には「賭博」「倫理」「道徳」といった機能を獲得していった発展過程を基盤に据え、適用する構造種別の選択を至適にそして慎重に行う必要性が示された考えることができる。

なお、「構造」の種類にはこのほか、言語学分野における「構文構造」や「パラダイム構造」、化学分野における「分子構造」や「結晶構造」、物理学分野における「物性構造」や「流体構造」、建築学分野における「軸組構造」や「トラス構造」、数学分野における「代数的構造」や「順序の構造」などが多様に存在するが、これらはそれぞれの学問分野における「特殊(特定)構造」と解されるため「スポーツの構造」を検討する今回の議論からは除外することとする。

3. 構造における構成要素について

(1) 要素の捉え方

スポーツを「構造」として理解するために必要な構造の概念や様々な形態に関する確認の手続きは、上述の論考によりある程度明確な方向性が示されたと考えられる。次に「構造」を理解する手続きとして必要となるのは、構造を構成している「部分(構成要素)」に関する検討であり、これに関しては「要素」をキーワードとし、どのような事柄を明確にすることが必要であるかの論考を進めることとする。

「要素」に関して言語的な観点からその意味を理解するため「大辞泉」¹²⁾に記載されている内容を見ると、「1. あるものごとを成り立たせている基本的な内容や条件。2. 物を分析したとき、その中に見出されるそれ以上簡単にならない成分。3. 法律行為または意思表示の内容において、その表意者に重要な意味をもつ部分。4. 数学で、集合をつくっている一つ一つのもの。」と解説されており、「要素」という言語が様々な意味を持ち、いろいろな分野で使用されていることが提示されている。

「要素主義(elementalism)」では、対象全体の部分を細かく切っていく、その各々の部分

についての解析を完璧に完成させればその対象物を完璧に把握できたと考える理論があり、これは対象物を知ろうとするとき、その対象物を構成するすべての要素についての知見を得ることによって、全体の知見を構成することが可能になるとする「還元主義 (reductionism)」に近い立場であると理解することが可能である。しかし、この考え方に対しては「全体論 (holism)」(「反要素主義」とも捉えることができる)としての立場も存在し、これは対象全体を部分や要素に還元して説明することはできず、全体は部分(要素)の算術的な総和を超える存在であると理路する立場である。三浦¹³⁾はこれをソシュール (Ferdinand de Saussure) の「恣意性」という視点から解釈し、言語の構造は「意味するもの (signifiant)」と「意味されるもの (signifié)」とが結びついた「記号 (signe)」であるが、この結びつきは一般的に随意的 (arbitraire) であり特定の音声は特定の意味を表す必然性はなく、それゆえ世界には違った多数の言語体系が存在する現実があることを示し、これを全体と部分の関係性といった構造論一般の考え方で理解するため、多数の風船を一杯に詰めた箱から一個の風船を取り出しても、他の風船が膨張し箱は一杯のままである例を示し、部分が変化しても全体は同じであるとう構造における「恣意性」を説明している。

また、同様の議論は「構造主義」「構造構成主義」においても行われており、「構造主義」の立場より「要素」について検討を加えると、全体は要素からなるけれどもそれが構造をもつということは、要素の特性には帰することが出来ない体系の法則性があり、諸要素はこれに従っているという全体性が存在すると考えるものであると理解できる。そしてこの体系の法則性には時系列で進展、変化、変容を生起させる変換性があり、また、こうした進展、変化、変容はより広い構造の下位構造となる場合においても構造を保存、規制する自己制御があり、このような動的状態の中に「要素」も存在すると理路するものである。このように事象を「構造」として捉え「要素」を解釈した場合、そこには「全体性」という法則があり、この法則には「変換性」という柔軟性と「自己制御」という自律性があることが示され、この「構造主義」を基盤とする「要素」の捉え方は、自然科学、社会科学、人文科学など多くの研究領域において準用することが妥当であると考えることができ、また、多くの分野の研究に適応することの至適性も認めることができるといえる。

一方、「構造構成主義」の立場より「要素」を見ると、様々な事象の構造の構築には恣意性の関与があることが必然であり、また、説明原理としての構造には多様性が出現することが当然であり、どれか一つの構造を絶対の真理として養護する態度は適切でないとしており、これを前提とすることにより、構造を構成する「要素」を考えると同様の論理が適応されることになると考えられる。そして「構造構成主義」では、個々の構造には予測を成立させることが可能な理屈が必須であり、全体として辻褃が合う一貫性の存在も不可欠であることが示されている。また、多様な認識から構築される多様な構造が相互に背反するといった共約不可能な状態を招かないようにするため、異質なものを排除せずすべてを包摂する状況の構築のため、

様々な構造を多元的に駆使し定式化する関心相関性といった原理が基本として必要であるとしている。この「関心相関性」は「身体・欲望・目的・関心相関性」と著すことができるもので、事象の存在、意味、価値といったものは全て関心、欲望、身体によって決定されていくと考える原理であり、過去に於いて思考されてきた様々な概念、理論を継承し体系化した「メタ理論」として捉えることが可能な概念であると理解されており、「要素」を捉える立場においてもこうした認識も基本として考えていくことが提示されたと考えられる。

以上のように、スポーツを構造として位置づけその成り立ちを「要素」から説明しようとする手続きにおいては、様々な理論があることを認識し、立脚する理論に基づいた「要素」の捉え方を確立し作業を進めて行く態度の必要性が示されたと考えることができる。

また、「構造」と「要素」の関係性に関する理論について山本⁴⁾は、「文化」の構成要素に関する考え方については多様な議論が行われており、また、アプローチの方法としては「文化」が成立するために必要な構成要素を条件面から捉えようとする立場（「要素主義」）がある一方、「文化」自体を分析的な視線で見つめ構成されている要素を個別に列挙する立場（「全体論」）があると述べており、「構造」を考えるときの「要素」の捉え方に関する検討においては、どのような立場から「要素」にアプローチを行うかといった基本的な姿勢を明確にする議論が必要であることを示唆しており、上述の態度に併せアプローチの視点も含めた「要素」の位置づけが求められていると考えられる。

なお、「全体」を構成する「部分」を意味する言葉には、本論で使用する「要素」のほか、「要因」「因子」「ファクター」「分野」「領域」「項目」「視点」など多様な言葉が存在しており、それぞれの言葉が持つ意味内容には差異があるものと考えられるが、スポーツを文化として捉えその構造を検討する本論ではこうした差異の吟味は論旨に関与しないと判断し省略することとし、「構造」を構成する部分（構成要素）としては「要素」を理路の基本に据え論を進めていくこととする。

（２）要素の組み立て

構造を構成している部分（構成要素）に関する検討の手続きにおいて、「要素」自体をどのように捉えるか（要素の捉え方）に続き明確にすることが求められる事柄は、部分（構成要素）がどのような機序で構成されていくのか、構造を構成する部分（構成要素）同士がどのような相互作用の状態に置かれているかについて検討を行う「要素の組み立て」といった事項になると考えられる。

稗方 他¹⁴⁾は、構造（システム）が作り上げられる機序や構成要素を明確にする際には、その構造がどのような機能を持ちどのような役割を果たしているのか、また、構造がどのような結果や成果を目指しているのかについて検討することが重要であり、構造が機能した後の結果に対して影響を与える「説明変数」をどのような考え方を元を選択するのか、また、

構造が機能することにより生起する結果である「目的変数」をどのような視点を元に設定するのが、構造全体を構成する「要素」を検証する手掛かりになると論じている。そして「説明変数」を規定する要因としては、構造が目指す目的達成に必要な不可欠である「機能要求」、また、目的達成において可能であれば入れておくことが望まれる「非機能要求」などがあることも同時に論じている。そして、「説明変数」と「目的変数」の機能によって構成される構造の要素の間には「効果予測（問題のフレーミング）」として位置づけられる過程が存在しており、この過程では複数の構成要素同士が複雑に影響を及ぼす「創発（エマージェンス：emergence）」（構成要素が相乗効果により大きな成果を発生させる、もしくは、構成要素がけん制し合うことにより相殺され成果が減少するなどの事象）が生起することも示している。

一方、中村¹⁵⁾は、定量分析や定性分析を実施する過程で必要となる「要素」の設定における考え方について、一般的原理を基にしながらか論理的推論を用いることによって導かれる結論として「要素」を設定していく「演繹法」があり、また、対象とする事柄の個々の事象を積み重ねることにより一般的原理を導き出し、その結果を基にしながらか「要素」を設定していく「帰納法」があり、両方のプロセスを対象によって使い分け、論理的飛躍や論理的矛盾が起らないように、「要素」間の構造や因果関係が明白となるように考えていく論理思考（ロジカル・シンキング）を用いることが先ず大切である、と論じている。また、論理思考だけで要素の設定を行うことに止まっていると、自由度や可能性といった未知の領域を探索する作業を制限する様態を引き起こすこととなり、新しい要素の発見、開発が行えない事態を招くこととなるため、創造思考（クリエイティブ・シンキング）、水平思考（ラテラル・シンキング）を併せて用いることも必要である、ことを示唆している。そして、社会現象や環境問題などいろいろな要素から構成される集合体の検討、また、現代において変化のスピードが一層加速している事象などの取り扱いにおいては、最終的にシステム思考（システム・シンキング）を導入し、複雑に絡み合った因果関係を様々な形態で内在する要素、加速しながら動的に変化する要素について検討していくことが必用である、と述べている。

このように「要素の組み立て」については、アプローチをする立場を明確にしておくことをスタートラインとし、対象となる構造の「説明変数」や「目的変数」また「効果予測」における「創発（エマージェンス）」を的確に把握することによって各々の「要素」を把握し、全体の「要素」がどのように組み立てられているかを明確していく手順の必要性が明らかになったと考えられる。また、具体的に「構造」を構成する「要素」を検討していく段階では、「論理思考（ロジカル・シンキング）」「創造思考（クリエイティブ・シンキング）」「水平思考（ラテラル・シンキング）」を組み合わせて用いながら作業を行い、最終的には「システム思考（システム・シンキング）」を活用することによって「構造」の全体像を解明する手続きが必要であることも示されたと理解でき、スポーツの構造を検討する際にもこのような視点や手順に留意しながら考察を進めることの重要性が明らかになったと考えられる。

4. 構造における分類方法について

(1) 分類の捉え方

「構造」全体を理解するために構成要素に分割する方法には、緑川⁷⁾が提示しているように、構造全体を先ずある基準で区分し、さらに別の基準でそれぞれの区分肢を区分していき、順次区分肢を細分化していく「階層構造」の手順、また、構造全体をある区分基準で分割し、また同じように構造全体を別の区分基準で分割し、複数の基準を独立して扱いそれぞれの区分肢を掛け合わせる「多次元構造」の手順など複数の方法があることが確認された。また、「構造」を理解するために「要素」の検討を行う際には、「要素主義 (elementalism)」「還元主義 (reductionism)」「全体論 (holism)」などを論拠として作業を進めることの必要性が示され、この作業の具体的な手順としては、対象全体を部分として細かく分割していき、その各々の部分について解析を行う過程が必要であることも確認された。以上のように「構造」を考える様々な手順、過程においては「分割」する手続きが必須となっており、この手続きを理論に従って適正に行うためには「分割」の拠り所となる「分類」の手法が必要であることは明白である。スポーツの構造を明確にしようとする今回の論考においては、最後に「分類」とはどのような事象、内容、作業であるかについての検討を進める必要性があると考えられる。

久我¹⁶⁾は、分類の歴史は人類の「知」の歴史であると述べ、体系的な「知」というものは必ず分類されており、体系化することと分類することは表裏一体の知的作業であるとしている。また、分類の歴史は、食用になる植物と毒を持つ植物、薬になる植物とならない植物を分類した新石器時代に始まり、当初は分類したものを「類」として列挙し並列に並べる形態であったが、時を経ることにより、似ている「類」を集めて一段上の「類」を形成し、さらに一段上の「類」同士で似ているものをより上の「類」として統合していく作業が行われたことを明らかにしており、この手続きを「上昇式 (ボトムアップ式) 分類」と位置づけている。一方、時代が進み文化が進展してくると、最初に大きなまとまりを把握し、それを段階的に小さく分類していく「下降式 (トップダウン) 分類」も姿を見せ始め、分類をする分割肢の数も「二分除法」「三分除法」「四分除法」と増加していき、分類の基準も具体的な概念から抽象的な類の概念へ拡大してきていることを示している。

中尾⁹⁾は「分類」について、成熟した人間は高次に発達した大脳機能によって、高次に発達した複雑な「分類」を行っているが、時として感性だけで論理的でない「分類」も行っており、普遍性を持つ「分類」の体系化の存在は未だに明らかにされていないと論じている。しかし、普遍性がなく体系化がされていない「分類」であっても、現実の場面で有効に機能していると認められる状況もあることより、不完全であっても機能し効率的である「分類」には存在意義があるとしている。

一方、阪本¹⁸⁾は、「分類」という行為は本質的に多様な内容を含んでおり「哲学論」「認識論」「比較思想」などとして扱うことが可能であり、それは人間が混沌として「わからな

い」ものを「分類」し「既にわかっているもの」に還元して納得をしようとする行為であるが、全てのもがいつでも還元できるとは限らず、むしろ未知のものは常に既知のものに還元できないところを持っているのが常で、「わかる」とは近似的な理解でしかないと論じている。また、正体がわからなくても、これ以上「分類」が出来ないものまで還元すれば、それは「分けられない」状態であると考えられ、そのような不可分のものは「要素」と位置付けることが可能となり、この様態は様々な「要素」の関係性を含め全体が「わかる」に達していると考えることが出来るとしている。このような坂本のロジックは、「分類」をすることによって「わかる」を導き出さず過程の逆の論理であり、「要素」から出発しそれらをまとめることにより全体が「わかる」と理路するものであると理解できる。つまり「分類」によって「わかる」ためには、全体を見通し見落としがないよう完全に「要素」に「分類」すること、その際できるだけ多くの「要素」に「分類」すること、複雑で不明確なものは段階を追って単純なものに「分類」し、「分類」された個々の「要素」を的確に把握し段階を追って積み上げ全体を秩序立てること、が「わかる」のメカニズムであると位置づけることが至適であると考えられるものである。

このように、「分類」には人間の「知」の体系化を原点とする長い歴史があり、「分類」することにより構造（全体）の理解が可能となる機能がある一方、「分類」には不確実性や不明性が内在していることを認識しておくことの大切さも明らかになったと考えられ、スポーツの構造を理解する手続きにおける「分類」においても、こうした点に配慮をすることの重要性が示されたと考察できる。

（２）分類の具体的作業

「分類」がどのような事象であり、人間がどのように「分類」に取り組んできたか、そして「分類」の内容をどのように捉えるべきかに関してはある程度明確になったと考えられるため、次に「分類」の具体的作業に関して検討を行うこととする。

久我¹⁶⁾は、「分類」の方法が確立し始めたギリシャ時代について解説し、「範疇論（カテゴリー）」がアリストテレス (Aristoteles) によって著わされ、「実体」（主語は何であるか）「性質」（どのようにあるか）「量」（どれだけあるか）「関係」（他とどのような関係にあるか）「能動」（何を行なうか）「受動」（何をされるか）「場所」（どこにあるか）「時間」（いつであるのか）「状況」（どのような状況なのか）「状態」（それが何をもってあるのか）の、10個のチェックポイントを分類の基準とする理論が主流となったことを紹介している。また、その後「分類」の方法は科学技術の進展に伴い様々な歴史的経緯を経ていき、情報量が膨大となった現代社会では「分類」方法の基準を対象物の形質や様態に置くのではなく、アルファベット順や五十音順を基準に分類し、事象の検索を行い易くする手法が取られるようになってきており、「知」の体系化のあり方そのものが大きく変質していることにも言及している。

森¹⁷⁾は、分類とは多数の対象をそれらに共通する性質によって分けることであり、この作業によって作成される分類表は、特定の分類体系を提示し、その体系の各項目に従って記号を対応させた一覧表であって検索するツールとなる、と述べている。また、分類体系の基本条件は、1) 学術体系に準拠する 2) 分類原則を遵守する 3) 分類項目名を明示する 4) 過去への対応力をもつ 5) 将来の展開に備えて、新主題を収容できる余裕をもつ 6) 実態に即した分類体系の修正ができる 7) 補助的分類表を併用する であることを示している。

坂本¹⁸⁾は、「分類」の存在や機能などに関して、① 分類は、認識や行動の為に人間が作った枠組みであって、存在そのものの区別ではない、② 分類を作る際には、必ず「その他」や「雑」の項目を置いておくことが有用である、③ 分類による「わかる」とは、その分類体系がわかるということであり、「わかり合う」とは、相互に相手の分類の仕方がわかり合うことである、とまとめている。

また、中尾⁹⁾は、本論「1, 構造の概念について」で示した内容と同様に「分類」の成り立ちに関して、クライテリオン (Criterion: 基準) によって分類されたタクソン (Taxon: 分類群) により構造は構成されていると論じており、孤立 (独立) タクソンの存在に関しては、主観的で閉鎖性があるため存在を認めることができず、「分類」の理論を支持する立場から必ず平行・タクソンを求め客観性を保つことが必要であると主張している。一方、「分類」の種別に関しては「類型分類」「規格分類」「系譜分類」があることを示しており、このほかに、同一事象を異なった方法で「分類」した結果を総合的にまとめ上げる「複合分類」「多次元分類」も存在し、またこれらの「分類」の関係性を平面的に捉えるのではなく立体的に捉えることにより構築される「動的分類」の可能性にも触れており、「分類」という手法の未来への可能性を示している。

以上のように、「分類」の具体作業を支える基準や分類方法に関しては、多くの議論が行われており、スポーツの構造を明らかにしようとする「分類」の手続きにおいては、何を目的として構造解明を行おうとしているのか、すでに行われている構造の「分類」にはどのようなものが存在するのかなどを十分に吟味し、利用する「分類」の基準や種類を選択することの必要性が示されたと考えることができる。

5. まとめ

以上の論考により「スポーツの構造」を明らかにしようとする際に基本的に必要となる条件である、「構造」をどのように概念として捉え位置づけるのか、「構造」を成り立たせている要素をどのように捉えるのか、また、「要素」を成立させる分類とはどのような手続きであるのかについての原理的な検討において、以下の事柄が明らかになったと考えられる。

- (1) 「構造」は、部分によって形づくられた一定の安定性を持った全体と理解されるが、不変ではなく人々の行為によって変容、発展し、上位の構造が下位の構造を制御する機能を

具備しているものとして概念化することが適切である。

- (2) 「構造の種類」には、区分肢に細分化していく「階層構造」(ロジックツリー)、区分肢を掛け合わせる「多次元構造」(フレームワーク)、ゴールデンカット(選択肢)によって分解する「ピラミッド構造」、タクソン(Taxon:分類群)により構成される「類型分類構造」、社会全体で標準化された基準により分類群が構成される「規格分類構造」、系譜のある事象を体系化する「系譜分類構造」があり、「スポーツの構造」構築に至適な構造選択が必至である。
- (3) スポーツの構造を「要素」から説明しようとする手続き、および構成する「要素」の検討においては、立脚する理論を明確にしてどのような立場から「構造」を説明し「要素」にアプローチを行うかといった基本姿勢を確立する議論が必要であることが示唆された。
- (4) 「要素」の組み立てを構築する際には、対象となる構造の「説明変数」や「目的変数」を明確にし、また「効果予測」における「創発(エマージェンス)」を的確に把握することによって全体の「要素」がどのように組み立てられているかを確立していく手順が必要である。また、検討作業は「論理思考(ロジカル・シンキング)」「創造思考(クリエイティブ・シンキング)」「水平思考(ラテラル・シンキング)」を併用して行い、最終的に「システム思考(システム・シンキング)」を活用することによって「構造」の全体像を解明する手続きが必要である。
- (5) 「分類」には構造(全体)の理解が可能となる機能がある一方、不確実性や不明性が内在していることを認識しておくことの大切さが明らかされ、スポーツの構造を理解する「分類」手続きにおいても、「目的」「基準」「種類」を吟味しておく重要性が示された。

以上のように「構造」には纏まりや秩序があり、安定的で不変性の高いものであり、抽象的で直接目に見えないシステムであるため、「スポーツの構造」のように歴史的経緯や社会現象などいろいろな要素から構成される集合体の検討においては「システム思考(システム・シンキング)」の導入が必要であることが明確になったといえる。

今後は今回の論考を踏まえ、また、先行研究である山本³⁾ 4)の結果を足場とし「スポーツ」の内部構造、外部構造の明確化を行い、その結果明らかとなった「スポーツの構造」をどのように有効に機能させスポーツの未来を構築していくかについての議論を行うことが必須であると考えられる。

謝辞 本論文の作成にあたり、神戸教育短期大学 図書館司書 伊藤寿美子氏に参考文献の収集などにおいて大変お世話になりました。この紙面をお借りし深謝の意を表させていただきます。

引用・参考文献

- 1) スポーツ白書編集委員(編)(2020)「スポーツ白書2020」～2030年のスポーツの姿～, 笹川スポーツ財団, pp341.
- 2) スポーツ庁・経済産業省(2016)「スポーツ未来開拓会議(中間報告)」～スポーツ産業ビジョンの策定に向けて～, pp52.
- 3) 山本章雄(2022)「スポーツの構造: 試論(1) -文化としてのスポーツの位置づけをめぐって-」神戸教育短期大学研究紀要, 第3号, pp. 27-42.
- 4) 山本章雄(2023)「スポーツの構造: 試論(2) -文化としての構成要素・位相および構造存在の検証をめぐって-」神戸教育短期大学研究紀要, 第4号, pp. 24-40.
- 5) 新村出 編(2018)「広辞苑」第7版, 岩波書店, pp3216.
- 6) 長谷川公一(2005)「第2章 社会の構造と構造化」宮島喬(編)「現代社会学」改定版, 有斐閣, pp34-52.
- 7) 緑川信之(1996)「分類法の構造: 階層構造と多次元構造」図書館学年報, 第42巻, 第2号, pp. 99-110.
- 8) 平井孝志・渡辺高士(2022)「日経文庫ビジュアル ロジカル・シンキング」第2版, 日本経済新聞出版, pp157.
- 9) 中尾佐助(1994)「分類の発想・思考のルールをつくる」朝日選書409, 朝日新聞社, pp. 331.
- 10) 渥美浩章(1984)「類型分類の役割と問題点」デザイン学研究, No. 46, pp. 20-21.
- 11) 和田勝(2006)「基礎から学ぶ生物学・細胞生物学」第4判, 羊土社, pp284.
- 12) 小学館「大辞泉」編集部(1998)「大辞泉」小学館, pp2958.
- 13) 三浦秀松(1997)「恣意性についての一考察 -恣意性は神話か?-」CORE, 同志社大学英文学会 core 編集部, No. 26, pp. 23-35.
- 14) 稗方和夫・高橋裕(2019)「デジタルトランスフォーメーションを成功に導く思考法システム思考がモノ・コトづくりを変える」日経BP, pp204.
- 15) 中村力(2022)「ビジネスで使いこなす 定量・定性分析大全」日本実業出版社, pp462.
- 16) 久我勝利(2007)「知の分類史・常識としての博物学」, 中公新書ラクレ, 中央公論新社, pp. 225.
- 17) もり・きよし原編(2005)「日本十進分類法」新訂9版 本表編, 日本図書館協会, pp. 418.
- 18) 坂本賢三(2006)「『分ける』こと『わかる』こと」講談社学術文庫, 講談社, pp. 226.

(令和5年11月15日 投稿)